

児童養護施設における新人研修プログラムの作成（第1報）

新潟医療福祉大学社会福祉学科
伊東正裕、松本京介

【背景・目的】

児童養護施設における不適切な処遇（以下マルトリートメント）が、後を絶たない。

厚生労働省が実施している「被措置児童等虐待届出制度」によって平成21年度からの5年間に受理された1149件のうち、明確に虐待の事実が認められた事例だけでも302件ののぼり、中でも児童養護施設の事例が半数以上を占めている（平成21年度～25年度184件、60.9%）。

我々は平成21年度学内研究奨励金を得て、児童養護施設におけるマルトリートメント防止に向けた予備的研究を行い、その結果については既に報告した。その後も継続して、マルトリートメントの防止に向けた具体的な対策の検討を行ってきたが、その過程で、児童養護施設の職員から、マルトリートメント防止のためには、新任職員に対して人と係わることの基本を伝える導入研修を行う必要があるとの声が多く聞かれた。

そこで、児童養護施設の新任職員に対する研修として望ましいと考える内容等について現場の職員を対象にグループ・インタビューを行い、それを参考として、マルトリートメントの防止を視野に入れた新人研修プログラムの作成を試みることにした。

【方法】

現に児童養護施設に勤務しているか、勤務経験がある者を対象に、半構造化されたフォーカス・グループ・インタビューを行った。参加者は8名（社会福祉士3・保育士4・臨床心理士1）であった。インタビュー内容は全て録音し、逐語録を作成し、発言内容を整理・分析した。この結果に基づく研修案について第2回のインタビューも行ったが、ここでは第1回のインタビューを中心に報告する。

【結果】

インタビュー参加者の語りは、以下の7つのカテゴリーに整理された。

＜児童養護の仕事の難しさ＞○一時保護所は善悪がはっきりしているが、児童養護は自由度が高い ○職員の間接性や価値観がさらけ出される ○自分には経験がないため、子どもへの共感が難しい ○子どもが心に食い込んでくる ○自分の家とは違うことをやっている ○職員同士のやりとりが無いと難しい

＜児童養護の仕事の喜びと誇り＞○関係性を作っていく醍醐味がある ○子どもとの関係の中で成長していく ○うれしいと思える時は必ず来る ○結果が出ることの喜び

＜新人教育に対するベテランの役割＞○新人を育てるのはベテラン ○

ベテランが出過ぎてもダメ、加減が難しい ○待つ姿勢も必要 ○ベテランのコミュニケーション能力・忍耐力・職業倫理・子どもと向き合う姿勢が問われている

＜新入職員の最近の傾向＞○マニュアルに頼る傾向がある ○ルールを欲しがると関係作りが難しい人が増えている ○ベテランに見えているものが、新人には見えない ○他分野の施設との違いに戸惑っている

＜ベテランへのケアの必要性＞○ベテランがつぶれていく ○バランス感覚を教えてもらいたい ○ベテランが十分話せる場所が必要 ○ペアレント・トレーニングなど共通したルールがあればよい ○中堅研修など、ベテランへのアプローチも必要

＜日常の指導の重要性＞○子どもを見る目は日々の中で伝えていく ○子どもの面白さを確認できるチームは質が変わっていく ○面白い引継ぎをする ○引継ぎの時に理念的なことを話題にし、注意やアドバイスをやる ○日々の具体的なやりとりは研修ではできない

＜新人研修への期待＞○ノウハウよりスピリッツを伝えたい ○自分で考える癖をつけてほしい ○人間関係の取り方・表情の読み方・コミュニケーション能力・職員同士のコミュニケーション ○自分を振り返る機会・自己分析・エゴグラム・描画テスト・自分の得意を理解する・自己を知る ○心理面接・一人一人の内面的なケアが必要 ○物事を客観的に見る癖・セルフコントロールの仕方・衝動性のコントロール ○講義で、事業計画・園のアウトライン・児童憲章・権利擁護・性的な事故対応・事故の痛みの歴史・トラウマについて ○その他、事例検討会、ペアレント・トレーニング、ロール・プレイングなど

【考察・結論】

児童養護施設の職員は、児童養護という仕事に難しさと同時に喜びや誇りを感じ、それらを新任職員に伝えていく役割を自覚している。一方、新任職員の傾向に不満や物足りなさを感じており、指導の難しさを痛感し、ベテラン自身が消耗することが無いよう、ベテランへのケアの必要を強く感じている。日常の業務を通しての指導こそが重要と考えているが、新人研修には、具体的なテーマの講義に加え、自己を振り返る機会や、コミュニケーション力・セルフコントロール力を高めるための方策などの導入を期待している。研修の形式については、講義による座学のほかにグループワーク・ロールプレイング・個別面接・事例検討など重層的に実施する必要があることが示唆された。

【文献】

紙数の関係で省略し、学術集会発表時に明示する。

【謝辞】

本研究の一部は、2014年度新潟医療福祉大学研究奨励金（人文社会系）の助成を受けて実施した。ここに感謝の意を表します。